



文献紹介

Brody, *Stories of Sickness*

概要

近年、倫理学（特に医療倫理学）において、物語の役割が注目されている。本書は、特に病・病気との関連の中で、倫理学における物語の重要性を指摘し、物語に基づく倫理実践の具体的なあり方やその正当化について論じている。私たちの自己や人生はしばしば物語として理解されるため、私たちが倫理的に生きるためには、私たち自身の物語に注目することや、物語的な視点によって倫理的問題を分析することが重要になる。

プロジェクトとの関係

身じまいに関わる意思決定支援においても、物語への注目は有効である。意思決定を支援するためには、当人の物語に注目することや、生じている問題を物語的な視点によって分析することが重要である。さらに、高齢者は一般に豊かな物語を持つ傾向にあるため、高齢者の意思決定支援では物語に基づくアプローチが特に有効であると考えられる。

キーワード：物語、ナラティブ、物語倫理、医療倫理学

Howard Brody, *Stories of Sickness* (Oxford University Press, 2002).

私たちと物語（序論）

病気になると、私たちの人生の物語は多くの場合大きく変化することになる。そのため、病気であるとはどういうことかを理解するためにも、病気に関わる倫理的な意思決定をするためにも、さらにはより良い医療とケアを提供するためにも、「物語」について理解することは大きな価値を持つ。

物語への注目（1章）

医療において物語が注目されるようになったのは、1980年代後半以降である。この流れは精神医学の分野から始まったが、今日では医療のあ

らゆる分野において、物語の重要性が認識されている。人の苦しみは、身体的な原因だけでなく、自らの経験にどのような意味を与えるかによっても大きく変化する。このような意味づけの作業は、自身の経験について物語を語り、それを人生や社会の文脈の中に位置づけることによってなされる。よって、苦しみを癒すことを目的とする医療において、物語を扱うことは不可欠である。

物語とは何か（2章）

では、そもそも物語とはどのようなものなのだろうか。形式的に言うと、物語とは、いくつかの

出来事が時間的な順序とテーマ的なまとまりに従って並べられたものであるといえる。

しかし私たちは物語を語る時、無意識のうちに筋が通るよう整えたり、聴衆に応じて語り方を調整したりする。また物語を聞くとき、語られなかった意味の空白を自らの信念や経験に基づいて補ってしまう。そのため、物語が全く同じように語られたり聞かれたりすることはありえない。さらに、一つの物語にはその背景となるような複数の物語が存在しているため、ある物語一つを取り出してそれだけで理解することもできない。物語は統一的にまとまっているように見えるが、実際には容易には理解できない複雑なものであり、ただ一つの正しい意味づけや解釈が存在するようなものではない。

病気と物語の関係（3-10章）

物語が病気の苦しみを癒すことができるのは、病気と物語のあいだに重要な関連があるからだ。そもそも病気とは、単なる統計学的・生物学的な異常ではない。病気は、自己の心理的な断絶や社会からの逸脱として経験されるものであり、その点で患者の心理的・社会的な異常とも深く結びついている。たとえば、病気は患者の時間や空間の感覚を歪めたり、人生計画を損なったりすることで、その人生に心理的な断絶を生み出し、さらには社会的な評価をも変化させる。

そして、私たちの自己や人生が、しばしば一つの物語として理解されることを踏まえれば、病気について理解し、その苦しみを癒すためには、物語に基づくアプローチが必要である。

物語倫理とは何か（11章）

では、物語に基づくアプローチ、すなわち物語倫理とはどのようなものなのだろうか。

物語倫理は、従来の医療倫理で支配的だった原則に基づくアプローチとは対照的な性格を持ち、原則には果たすことのできない役割を担う

ことができる。原則は、倫理において法や規制を定めるという重要な役割を果たすが、倫理の問題はそれだけに尽きるものではない。倫理においては、行為の理由を理解可能にすることや、責任の所在を明確にすること、さらには相互の不一致を発見することも重要である。これらの実現のためには、より個別具体的な情報、すなわち物語に注目することが不可欠である。

加えて、原則を個別のケースに適用したり、それに応じた原則の作成や修正をしたりするためにも、個別の事例を物語的な視点で見ることが重要になる。たとえば自律尊重の原則も、当初は確立された原則でなかったにもかかわらず、さまざまな歴史的事例や具体的な議論が積み重なることで、今日では医療倫理における最も重要な原則の一つとして定着した。

このように、倫理においては、従来の原則に基づくアプローチだけでは不十分であり、物語に基づくアプローチが必要となるのである。

物語倫理を実践する（12章）

それでは、物語に着目する倫理的な実践として、具体的にはどのようなものが考えられるだろうか。

第一に、物語に注目することで、過去の行為を適切に評価することができる。たとえば、ある人が友人を友情から助けたという事例は、義務論や功利主義といった原則だけで評価すべきではない。その行為に関してどのような義務があるかといったことや、その行為によって福利が増大するか減少するかといったことだけではなく、当人同士の友情関係といった関係性も考慮しなければならない。同様に、ある人が誰かとの約束を守るために行為したという事例も、その約束が当人にとってどのような意味を持つのかといったことに基づいて評価すべきである。このような関係性やアイデンティティは、その人の物語を通してでなければ理解できない

ため、原則ではなく物語に注目してはじめて、こうした行為を適切に評価することができる。

第二に、物語に注目することで、未来の行為を適切に決定することができる。将来の行為について、原則は非個人的かつ文脈から切り離されたものであり、それだけで適切な行為指針を与えることは難しい。当人の物語という個人的で具体的なものを通して考えることによって、なすべき行為をより適切に決めることが可能になる。特に、宗教や文化の力が弱まった現代において、物語に注目することは有効である。

第三に、物語は、原則だけでは捉えにくい些細な行為へと注意を促し、具体的な「台本」を提供することができる。物語的な視点は、倫理的な行為を細部に至るまで具体的に導き出すことを可能にする。以上のように、物語に基づくアプローチは、倫理において原則だけでは不可能な実践を可能にする。

物語倫理の正当化（13章）

以上のように、倫理において物語は重要な役割を果たすが、物語から導かれた結論はどのように正当化されるのか。

第一に、物語倫理は、現代の医療倫理において用いられている決疑論と似たアプローチを採用することができる。決疑論とは、特定の事例における判断を、いくつかの既存の類似事例と比較することで導き出すというものである。物語倫理も同様に、ある人の物語に基づいた判断を、類似の物語と比較することで正当化することができるだろう。

第二に、私たちは矛盾なく整合的な人生の物語を価値づけているため、整合的な物語はそれ自体で正当化の力を持つと言える。ある人の行為について、その人の人生の物語内部での整合性によって正当性を評価できるだろうし、本人とは異なる視点からの物語との整合性によってより適切な評価もできるだろう。このように考

えるならば、物語倫理における正当化のプロセスは、個別的な判断と原理原則を照らし合わせて両者の均衡を探る反照的均衡と類似したものだといえる。ただしそれは、異なる複数の物語間での類似性や整合性と、一つの物語の中での整合性のどちらともを評価するより複雑なものである。この「物語均衡」は、ある人の人生の物語だけでなく、その人が属する文化の物語や、科学理論や倫理理論といった社会の物語、そしてそのような物語がいかにして生まれたのかを語るメタ物語まで含めて、大きな枠組みの中で類似性と整合性を評価するものである。

このようにして、物語倫理の結論を正当化することができるだろう。

人生の諸段階と物語倫理（14章）

物語倫理は、人生の諸段階における倫理的問題をより適切に扱うこともできる。一般的な見方では、人生はしばしば、幼児期を上昇、成人期を頂点、老年期を下降とする単純な放物線として理解される。しかし、この単純化された解釈では、人生の諸段階に質的な違いがあるという事実を捉えられない。

特に、幼児と高齢者は、他者に対する依存度という点では似ているが、幼児がまだ自身の物語を持っていない一方で、高齢者は既に自身の物語を持っているという点で異なる。まだ自身の物語を持たない幼児は、当人の価値や目標が未知数であるため、単に本人の利益といった概念を適用することは不適切になりうる。そのため、幼児を家族や周囲の人々と結びつきながら展開していく物語の出発点として捉え、幼児本人の将来性や家族の利益を総合的に考慮するアプローチが重要となる。また、既に物語を持っている高齢者は、その継続してきた豊かな個人的歴史を振り返ることができるため、認知症以前と以後を単に異なる人生として切り分けて理解することは不適切になりうる。そのため、当

人の人生という一つの物語におけるさまざまな関係性やアイデンティティ、さらにはその物語の共著者である家族や友人の意見を参照することが重要となる。

このように、物語倫理は、人生の諸段階に応じたより適切な意思決定を可能にする。

物語倫理はどこまで必要か（14章）

以上のように、意思決定を支援するためには、私たち自身の物語に注目し、物語的な視点によって倫理的問題を分析することが重要だが、この物語に基づくアプローチは支援者に過度な負担を強いていると考えられるかもしれない。あらゆる人の物語に常に深く注目し、すべての倫理的問題を物語的な視点によって分析することは、現実的には難しいのではないだろうか。

しかし実際には、必要とされる物語倫理の度合いはケースごとに異なり、スペクトラム上に位置づけられる。ある人や問題においては、物語に基づくアプローチがきわめて重要である一方、別の人や問題においては、その重要性が最小限にとどまる場合もある。

重要なのは、物語倫理が必要とされるケースにおいて、支援者がより深く物語を探ろうとする姿勢を持つこと、そして同時に、特定の物語について自分がどれほど知らないかを自覚し、すべてを理解しているかのように考えない謙虚さを持つことである。

まとめとコメント

本書は、倫理学（とりわけ医療倫理学）において、なぜ物語に基づくアプローチが必要なのか、また具体的にどのようなアプローチが可能なかを、さまざまなケーススタディや文学作品を通して、まさに物語的に示している。私たちの自己や人生は物語として構築され、理解されており、それゆえ私たちの苦しみや意思決定も、物語という形式や性質と深く結びついている。苦しみを癒し、よりよい意思決定を支援するためには、さまざまな人や問題に対して、物語の形式や性質に基づくアプローチが重要となるというのが本書の最大の主張である。

物語倫理は、原則では捉えにくい人生の時間的な側面を捉えることができるように思われる。そのため、高齢者の意思決定支援においてこそ、これまで時間をかけて構築されてきた経験や人間関係といった人生の物語に注目することが重要だろう。また、病気や認知症など、人生の物語に大きな影響を与える出来事は、高齢者においてより多く生じる。このことから、高齢者の意思決定支援において物語倫理が重要であることは明らかだろう。しかし一方で、物語倫理は反-原則的であるがゆえに、体系的に理解することが難しい。物語倫理をいかに研究し、また教育するのかという点は、今後の重要な課題である。

黒田雄誠
京都大学文学部・学部学生

SMBC京大スタジオ「誰もが生・死後の尊厳を保つための持続可能な身じまい・意思決定とその支援」プロジェクト（幸せなしまい方PJ）ではさまざまな領域の意思決定を対象として文献調査を進めています。詳細は[プロジェクトのウェブサイト](#)と[調査報告アーカイブ](#)をご覧ください。
ご意見・ご感想はinfo@ethics.bun.kyoto-u.ac.jpまでお願いいたします。